石評梅の恋

中本　百合枝

作家石評梅（本名石汝璧）は一九〇二年八月十九日、山西省平定県に生まれた。山西省立女子師範学校卒業後、一九二〇年（十八歳）北京国立女子高等師範学校体育科に入学、その翌年頃から、『詩学』半月刊・『晨報』副刊などに詩を発表し始める。一九二三年（二十二歳）大学を卒業すると、北京師範大学付属中学女子部の訓育主任・体育教師となり、教育に情熱を注ぐかたわら、友人たちと『京報』副刊『婦女周刊』（一九二四年十二月～一九二五年十二月）・『世界日報』副刊『薔薇周刊』（一九二六年～）を編集し、作品を発表する。一九二八年（二十七歳）九月三十日に脳膜炎で世を去るまで、詩・散文・小説・游記・戯曲を残す。彼女の死後、友人たちの手によって編集された散文集『濤語』（一九三一年・神州国光社）・『偶然草』（一九三二年・文化書局）が出版された。

評梅の恋人高君宇は、一八九六年十月二十二日山西省静楽県峰嶺底村に生まれる。一九一六年、山西省立第一中学を卒業後、北京大学に入学した。一九一八年から李大釗の教えを受ける。一九二〇年三月、李大釗の指導によるマルクス主義研究会の会員となり、また同年九月には、北京社会主義青年団の書記を担当。一九二二年一月、モスクワで開かれた遠東各国の共産党と民族革命団体第一次代表大会に中国代表の一人として参加し、翌二三年、「二・七」ストライキ指導者の一人となっている。一九二四年には李大釗、毛沢東らと国民党第一次代表大会に参加、北京政変後は革命活動のため広州、上海、天津をまわるなど、精力的に活動した初期の共産党員であった。だが過労が重なり、肺病の悪化に急性盲腸炎を併発して、一九二五年三月五日、二十九歳の生涯を閉じることになった。『嚮導』『政治生活』などに彼の文章がみられる。

廬隠の「石評梅略伝」[1] によると、石評梅と高君宇は一九二三年、評梅が大学を卒業した年に、山西同郷会で出会い、話しているうちに彼が評梅の父の教え子であったことがわかったとある。だが一九二三年に君宇が評

梅にあてた手紙に、「私たちは文通して三年になるが、ごく平凡なつきあいであり・・・」[2] とあるところから、一九二〇年頃から時々手紙のやりとりをする程度の仲が続き、一九二三年頃急速に親しくなったのではないかと思われる。彼は同じく評梅への手紙の中で、父が強引に取り決めた結婚のこと、それによってひどく傷つき、このために評梅に近付くことを避けていたということ、そしてこの包辦婚姻（注、本人の意志を無視して親または周囲の者が取り決めた結婚）を清算する気持ちを持っていることを述べる（一九二三年十月〜十二月付の手紙 [3] ）。そして翌年五月、革命運動のために山西に赴いたとき故郷に帰り、離婚を申し出るのである。評梅との愛を成就するために君宇は努力を重ねるが、評梅の態度はどうであったろうか。散文「濤語」[4] には君宇が死に至るまでの二人の様子がかなり丁寧に描かれている。

一九二三年十月二十四日、西山碧雲寺から送られてきた君宇の手紙の中の一枚の紅葉に「満山秋色関不住　一片紅葉寄相思」（全山の秋のけはいに心を閉ざしきれず、ひとひらのもみじに我が思いをたくす）と書かれている。それを見た評梅は、「私には彼にさし出す心がないのだから、受け取って彼をだますことはできない」と、その葉の裏側に「枯萎的花籃不敢承受這鮮紅的葉兒」（しおれた花かごは、このあざやかなもみじを受ける勇気がありません）と書いて君宇に送り返してしまう。また、二人の間で最後に交された会話の中で評梅は、私の心をあなたに捧げるから、あなたも私のために犠牲になってほしい、私は以後愛するがゆえに独身で通すから、あなたもそうしてほしいと言い、君宇の離婚が成立しているにもかかわらず、結婚の意志がないことを表明している。これに対して君宇は、「安心していいよ。よくわかっている、たとえ死んでも君を理解することができる。そうでなかったら、こんなふうに未練がましく君を思い続けたりしないよ」と言う。このあと君宇は協和医院へ入院し、評梅は会議のために自分の勤める学校にもどり、それっきり二人は二度と会うことはなかった。

君宇の死後、生徒のまえでは悲しみをみせなかったようであるが、雪の降りしきる中を、君宇の眠る陶然亭で何時間も泣いていたり、わけがわからなくなるほど酒を飲み続けたり、評梅は後悔の日々を送ることになる。君宇を亡くした悲しみは彼女の作品の主題の一つとなり、「天辛」「濤

語」「墓畔哀歌」「雪夜」の散文にその心境が語られている。また廬隠の『廬隠自伝』『帰雁』『象牙戒指』にも、この間の様子が描かれている。

では、評梅に結婚を拒ませたものは何だったのであろうか。高君宇の弟高全徳は、「憶評梅――写在『石評梅作品集』出版的時候」の中で、

「君宇が離婚の知らせを評梅に告げると、彼女は何度もやめさせようとした。彼女は『むしろ個人の幸福を犠牲にしても他人の利益を犯したくはないし、ましてや他人の幸福を取りあげて自分のものにするなどということはしたくない』と言った。だが彼女のこの慈しみ深い心も、封建的な包辦婚姻の束縛を打破しようとする君宇の決心を、最後まで変えさせることはできなかった。」[5]

と述べている。また、親友の陸晶清も、「彼女自身の言葉を用いれば、彼女は封建礼教の反抗者でもあるし、また世間の『こわい噂』の前での弱者でもあった」[6] とし、評梅が旧礼教を打破する勇気がなかったことが、二人が結婚できなかった原因だとしている。一方、似たような境遇にあって評梅のよき理解者であった廬隠は、初恋の人でやはり妻をもつW君との交際で評梅が傷つき、君宇の愛を受け入れる資格がないと考えたせいだとしている。いずれにしても、彼女が行動に踏み出せなかったことは事実である。

評梅自身は、散文「靖君」の中で、妻ある人を愛した友人を励まし、自分は愛情を全うして旧制度の下の反逆者になりたくなかったし、理性のために愛を捨てた不幸せな人間になりたくもなかった、このような愛と理性の矛盾を解決する前に、愛するK君を死境に陥れてしまったと述べる。[7] そして散文「露沙」（一九二四年九月二十日）の中では、妻のある郭夢良との結婚を遂行した廬隠が厳しい批判にさらされているのに対して、「中国婦女界の沈滞を思うと、私たちのか弱い肩に、先覚者が人々をめざめさせる精神、闘争を指導する責任を負わないわけにはいきません。だから露沙、あなたが多くの同胞たちのために未来の光栄をつくりだしてくれることを望みます。（世間の非難から逃れたいという）私情のためにすべてを捨てたりしてはなりません」[8] と述べる。また包辦婚姻を主題とした小説「只有梅花知此恨」「棄婦」を書いており、後者は従兄が妻を解放するた

め離婚するが、妻は実家に帰って自殺、主人公は自殺した妻に同情するというものである。結婚の自由のためにあえて世間を敵にまわした友人たちに声援を送る一方で、何らの生活手段も持たない離縁された妻たちに心からの同情を寄せているのだ。

では石評梅は、婦人問題についてどのような考えを持っていたのであろうか。彼女は『婦女周刊』の「発刊詞」（一九二四年一二月十日）の中で、この雑誌の目標として、「（１）偏った道徳を粉砕する（２）礼教の束縛から抜け出す（３）芸術の才能を発揮する（４）おぼれている弱者を救う（５）未来の新たなる生活を創造する（６）内外のニュースを紹介する」[9] という方針を打ち出している。また、同じく『婦女周刊』の中で、婦人問題を根本的に解決するには男女平等の教育を実現することである、これによって精神的独立と経済的独立が得られる（「到全国姉妹們的第二封信」一九二五年二月二十五日）とする。[10] 廬隠の『象牙戒指』に引用されている、一九二八年六月二日の評梅の日記（未見）に、婦女教会が連日、圧迫された娼婦を救い、女子の社会的地位を高め、封建思想を打倒しようと声高に叫んでいるのはまったく滑稽だ、自分自身を救うこともできない婦人がどうして他人を救うなどという幻想を持つのかさっぱりわからないと記す。[11]「婦人の解放は婦人自身の手で」、「平等な社会は平等な教育から」という彼女の主張は、五四時期の知識青年たちの一般的な主張でもあった。

大学卒業の学歴を持ち、教師として経済的独立も果たしていた評梅は、自らの考えの通りに女性差別を一歩一歩克服しつつあった。だが、社会的に自分より弱い立場にある君宇の妻を押しのけて自分が妻の座にすわること、またそのために世間から受けるであろう厳しい非難に身をさらす勇気がなかった。そして廬隠も言うように、W君との交際のために自分には君宇に愛される資格がないと考えていたところからみて、貞操観念にも深くとらわれていたものと思われる。婦人問題を階級闘争の一環として、きわめて観念的に捉えていたと思われる高君宇は、この評梅の拒絶をどう理解し、どの方向に解決しようとしたのであろうか。

君宇の離婚からその死までは、わずか八カ月の時間しかなかった。君宇の愛を拒絶したまま永別することになった評梅は、それから三年あまりの歳月を厳しい自己処罰のうちに過ごし、その後を追うようにして二十七歳

の若さで亡くなる。

（注１）『石評梅作品集　戯劇　游記　書信』（中国作家研究資料叢書　書目文献出版社　一九八五年二月）Ｐ１８８
（注２）『石評梅作品集　詩歌　小説』（同上　一九八四年二月）Ｐ１２
（注３）注２　Ｐ３～１３
（注４）『石評梅作品集　散文』（同上　一九八三年八月）Ｐ６４～８４
（注５）注２　Ｐ１５
（注６）注２　Ｐ１０
（注７）注４　Ｐ５１
（注８）注４　Ｐ１７
（注９）注４　Ｐ１７９
（注１０）注４　Ｐ１９４
（注１１）『象牙戒指』（文学研究会叢書　商務印書館　一九三四年二月　初版　一九三五年五月三版）Ｐ２５０

会員消息

1　釜屋　修と加藤三由紀は、作家協会山西分会の招きを受け、1986年9月第二次趙樹理国際シンポジウム（太原）に参加、大会終了後イリノイ大学のJosephine Mathews女史(華名 馬若芬)とともに趙樹理の故郷や長治など縁の地を訪問した。日本からは、ほかに三重大学の萩野氏、埼玉の歌人加藤氏、作家の桂氏も参加された。

2　加藤三由紀は、二年間の中国留学を終え、この七月に帰国、大学に復帰した。

3　留学中の小塩恵美子は、二年目をむかえ北京で奮闘中。

4　下出鉄男は、昨年十月から金沢大学に赴任、大学の宿舎で新婚二年目をむかえている。